

講演録

土手の花見 (下)

～防災と市民力～

立木茂雄

同志社大学社会学部教授

本講演録は、平成22年11月17日に開催された「平成22年下京区社会福祉大会」においてご講演いただいた内容を要約したものです。前号に引き続き紹介させていただきます。

地域の中にあるぜい弱性を知る

***地震関連死が1件もなかった能登半島地震の取組**

地域の災害誘因を知ったうえで、次に、地域の中にある脆弱性というものに、日ごろから目を向け、関心を持つていくことが大事になってきます。

普段から地図を使いながら、配慮を要する方々の支援をすることによって、震災関連死が1件も起こらなかった地震災害が、2007年3月の能登半島地震です。



平成19年3月能登半島地震における災害時要援護者への対応について



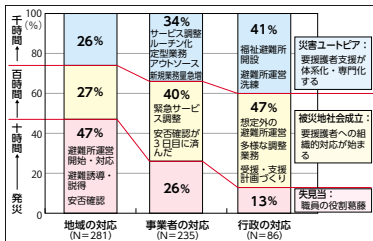
石川県輪島市門前地区の対応

***発災から10時間は地域の方々が「主役」**

能登半島地震の際の要援護者への対応について、石川県輪島市の門前地域に行き調査をしました。そこで要援護者の対応に当たられた地域の方々、介護保険のケアマネージャーさん、行政の担当部局の方々に、実際に行った支援の内容をカードに書き出していたくださる作業を行いました。

発災から当日の夜までの10時間、翌日から3・4日目ぐらいの100時間目まで、100時間以降の、3つ時間の流れの中で集計をしてみました。発災直後、行政にできる要援護者の支援は、本来に限られたことです。翌日から3・4日目までの間は、いろんな調整業務や計画策定に忙殺しておられます。3・4日たつとようやくいろいろなサービスが、市民の目から見て提供されるようになります。

最初の10時間では地域の方々が主役となっておられ、全体の4分の3まで、行政のサービスが当てにできるまでの3・4日までに集中していました。この調査結果を見ましても、発災から10時間まで、誰かが要援護者支援の主力・主役になるのか、それは地域の方々であるというのが、明快に見てとることが出来ます。



*日頃の地域福祉活動、頭の中にあつた地図

能登半島地震は、震災関連死がなかったことで大変有名ですが、そこには普段からの地道な地域活動がありました。この門前地域では、どこにどういふ方がお住まいであるのかを、民生委員さんや、民生委員さんをサポートするボランティアの方が、すくなくご存じでした。なぜ、ご存じだったのかというと、住宅地図をコピーして、蛍光ペンで「ここはお一人暮らしの方がお住まいです」とか「ここは高齢夫婦世帯です」とか、「寝たきりの方がいらっしゃいます」などがわかるような地図を作り、毎年年末にその更新をされておられました。また、地図を作っているだけでなく、これに基づいて、担当地区の民生委員さん、あるいはボランティアの方が、月3回から4回は、訪問をずっとされていました。

いつからしていたのかというと、阪神淡路大震災の年からです。門前地区一帯では、高齢化がだんだん進んでいて、2007年の時点では住民の3割以上が65歳以上の方となっておられ、そのう町村合併が進み、行政というものが遠くなくなっていました。その中でどうやって、みんなの生活を支えているかといいますと、それは日頃の地域福祉活動が、ものすごく大きな力になっていたのです。その道具として地図が使われていたのです。

要援護者の支援をする時に、どこにお住まいなのかということも、ちゃんと把握していることが、すくなく力を発揮するのだということをお話したのが、この地震災害でした。

防災意識や活動を日常のものとするためには…

***「土手の花見」と防災**

「防災」のことを考えるとき、阪神淡路大震災や能登半島地震のように、大きな被害や出来事をご紹介しますのですが、我々の人生の中で、災害に遭遇することは、極まれに起こらないことです。ほとんど起こらない、自分の人生の中で起こらないかもしれないようにすることに備えるというのは、大変に難しいことです。

そこで、発想の転換をしましょうというのが、「土手の花見と防災」というものです。京都の場合でも、疏水や河川の土手が桜並木になっています。これはなぜなのか。昔、北陸地方より北ですと、冬の間は霜が立って、それが春先に溶けてしまうと、土手の中で霜だった部分が隙間になってしまい、土手が緩んでしまいました。緩んだまま6月の梅雨、あるいは台風が襲ってくると、土手が切れかねない。ですから、その梅雨が来るまでの間にしっかりと踏み固めてやる必要があるのです。

だからと言って、「梅雨が来るまでの間に土手を踏み固めますから、何月何日、土手に出てきてください」というような、声掛けをしたかということ、そんな無粋なことは昔の人はしていませんでした。何をしたら、代わりに土手の近傍に桜を植えたのです。すると、春先になって桜が満開になると、人々が花見に訪れ土手の上を歩いてくださる。知らず知らずのうちに、お花見が土手を踏み固めることに役に立っていたという、お話であります。



出典: <http://hanami.walkerplus.com/kansai/kyoto/index.html>

「土手の花見と防災」というのは、普段から楽しみながらやっていることが、実は知らずのうちに防災につながっている。例えば、門前地区での毎月の小地域福祉活動というのが、めったに起こらない地震の時に、ご高齢の方や足の不自由な方の命を救う、安否を確認し、避難所にお連れするというところに、大変大きな力を発揮しました。福祉のため、日常の幸せのためにやっていたことが、実は「土手の花見と防災」につながっていたということです。

*地蔵盆の効用



出典: <http://homepage1.nifty.com/heiankyo/kekishi/teki26.html>

これは京都の慣れた風景ですが、皆さんが楽しみでやっていることが、実は知らずのうちに土手の花見と同じ仕組みで、お互いを知り合う契機になっていて、災害が起こった時に住民の命を救うという働きをするのです。防災、防災と言わずに、普段皆さんがなさっておられる、例えば地域福祉のお仕事、実は非常時に役に立ちます。

災害の時には、普段やっていることしかできないのですが、言い換えれば、普段から日常で地域の中におられる配慮を要される方について、お話し合いをし、面識をつけ、地域の方々と仲良くされておられることが、いざ災害という時にそのまま活かせるのです。災害になってから、何かするというのでは、それは決して実現することはできないでしょう。もし、災害の時に何かしないといけないのであれば、普段からやっておきましょう、ということ。福祉の現場で携わっておられる皆さん方を、「土手の花見と防災」のように非常に「粋」な防災をされている、そういう担い手であると強く感じています。

*最後にまとめとして

まとめとして、災害のイメージ、正しいイメージを持ちましょう。その中で地面の揺れ、ハザードが災害をもたらすのでない、そういう揺れが、揺れに抗しきれない、脆弱な部分が社会にあることによって、被害は発生するのだ。そういう脆弱な部分が社会の中にあるということであるならば、それは私たち人間の力で、その部分は補うことができる。それによって、被害は非常に少ないものにできるのだ。それをどんなふうにしてやっていけばいいのだろうかということについては、普段から脆弱性について、十分によくご存知であるならば、いざという時にそれをカバーする手立てというものを私たちが持っているのだ。言葉を換えますと、「土手の花見と防災」をしていきましょうということです。

下京区基本計画での取組

「下京区基本計画」の計画期間の前期に重点的に取り組む「まずやること」に、「知らない人(世帯)を減らそう!」を運動目標として、「いざという時のための安心安全の情報共有」を掲げています。これは災害時の避難などに支援が必要な単身高齢者や高齢世帯夫婦などの情報を学区や町内単位で把握し、非常時に迅速な対応を進めるための取組です。